

---

# 悪魔と退魔師の奇妙な同居生活

カルパッチョ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

悪魔と退魔師の奇妙な同居生活

### 【Nコード】

N3346D

### 【作者名】

カルパッチョ

### 【あらすじ】

悪魔を討つことを仕事している高校生原田太助のもとに一人の悪魔が訪れた。上級魔であるアヤは太助との同居を命じられたと言うが・・・互いに憎むべき存在の二人の奇妙な同居生活が始まる・・・

## 「話「降りてきた悪魔」

「話「降りてきた悪魔」

その日は仕事帰りに少し寄り道をした。そこで何が起きるかなど知らずに。ただ、何となく公園に立ち寄り、少し空を見ていた。たったそれだけのことだった。だが上から何かが降ってきた。それが最初は何なのか分からなかった。やがて、それは起き上がった。

「・・・ここ・・・どこ？」

姿は人間に似ている。だが目の前の者が人間でないことはすぐに分かった。一般的に人間を襲い、世界を混沌へと叩き落すと言われている生物。それが悪魔だ。人間を歴史ごとと葬ろうとする危険な種族。昔から人間と悪魔は対立していた。人間は大半の者が非力ではあるが、中には退魔師と呼ばれ悪魔を退ける力を持った者達もいる。その退魔師達が中心となり悪魔を排除するための戦いが各地で起きている。ベンチから立ち上がり、ポケットから一本のナイフを取り出す。ナイフの柄の部分には不思議な紋章が刻まれていた。

「お前、悪魔だな？」

「・・・退魔師！？」

空から降りてきた悪魔が驚きの声を上げる。悪魔は力に応じて三つの階級に分かれている。低級魔・中級魔・上級魔だ。中級魔や上級魔であれば退魔師を見ても驚く事はないが、低級魔であれば話が違う。

「悪魔なら、退治するのが俺達の仕事だ」

「私は用があつてここに来たんだったば」

「人を襲うのが用事か？」

ナイフを突き刺す。悪魔はそれを回避する。反撃できるはずなのにそうしようとはしていない。あまり力がないのだろうか。退魔師の

ナイフが悪魔の右腕に刺さる。

「あっ・・・」

「・・・終わりだ」

もう一撃決めれば終わる。だが退魔師は動けなかった。自分の足元を見る。地面から鎖がのびていた。そしてそれは退魔師の足元からみつ

いている。悪魔は最初からただ逃げていたわけではなかったのだ。罠にはめるためにがむしゃらに逃げているフリをしていたただけなのだ。

「・・・ふう・・・いきなり退魔師と会っちゃうなんて・・・ついてないなあ」

「・・・中級魔・・・いや、上級魔だな」

「見ただけで分かるなんて・・・かなりの腕みたいね」

退魔師は舌打ちした。このままでは殺される。どうやっても逃げない

ればいけない。そして次は確実に殺す。悪魔などこの世に居てはいけ

ない存在なのだ。だが、目の前の悪魔はいつまでたっても退魔師を葬ろうとはしなかった。

「・・・あなた、名前は？」

「・・・悪魔に名乗る名前などない」

「冗談言っでないで、早く答えて」

「原田太助。それが俺の名前だ」

悪魔は名前を聞いた途端、何故かにこつとする。その微笑が逆に怖かった。だが、足にからみついていた鎖が解けていく。一体なんのつもりなのだろうか。太助は立ち上がり、悪魔を見る。

「運がいいのか悪いのか・・・どっちか分からないわね・・・」

「お前・・・何のつもりだ？」

「私、アヤ。階級は上級魔ね。これからよろしく」

「は？」

太助は思わず聞き返す。アヤはため息をついて説明を始める。

だがそれは太助にとっては最悪のものだった。

「私はこれからあなたの家で生活するの」

思わず啞然とする太助。アヤはにここにと笑っている。一体誰がなんのために。最近、悪魔と人間が友達になるようなケースなら何度か見た事もあるし聞いたこともある。だが太助は人間ではあるが、悪魔と完全に対立している退魔師だ。悪魔と退魔師の同居など聞いたことが無い。

「私も聞いたこと無いよ。世界で初だね」

「誰の命令だよ、誰の」

「悪魔王とこの世界のトップの人。退魔師と悪魔の共存が可能なのかのデータが取りたいってさ」

アヤはけらけらと笑いながら言う。だが太助にとっては冗談ではない。悪魔と同じ家で生活するなどありえない。いつそこで消してしまうか。だがアヤは上級魔だ。本気で戦えば間違いなく負けるだろう。

「で？まだ家には帰らないの？」

「・・・俺はお前を家には入れんぞ」

「それじゃあ、どうしろって言うのよ」

アヤが怒鳴る。だが太助も退くわけにはいかなかった。何があっても悪魔を家の中に入れるなどしてはならない。悪魔は太助にとっては討つべき存在だ。共存など考えられない。

「帰還命令が出るまで私、向こうには帰れないのよ」

「・・・他を当たれ、他を」

「仕方ないじゃない、あなたに決まったんだから」

太助がどういう方法でと聞いた。するとアヤはくじ引きでと言った。

何か特別な理由でもあるのかと思えばただ単に適当に決まっただけか。

だが、人間側のトップ達も加わっている計画なのだ。これに協力

しな

いのはさすがにまずいかもしれない。

「期限とかは決まっているのか？」

「知らないわ。何も聞いてないもの。あなたと私しだいでしょうね」

「なら、すぐに終わるって事もありえるんだな？」

「そうね。その逆にずっとすることもありえるけど」

アヤの言葉は太助には聞えていなかった。二人しだいでは1日や

二日

で終わることだってありえるのだ。そういう風に仕向ければいい。

なら

話は簡単だ。太助は考え事をしながら歩いていく。アヤもその後ろに

ついていった。そしてこの時から、退魔師と悪魔という二人の奇妙な

同居生活が始まった・・

## 二話「譲れぬ考え」

二話「譲れぬ考え」

「私だつてね、考えを変えるつもりはないわ」

「なら、家から出て行け。ここは俺の家だ」

机を挟んで二人は対立していた。退魔師原田太助の前に上級魔アヤが現れたのは昨日の事だ。あれから1日が経つが、二人とも些細な事で衝突を繰り返していた。

「それとこれとは話が別でしょ！」

「嫌なら出て行けばいい。ただ、それだけじゃないか」

二人が睨みあう。この言い争いの原因はアヤが太助と同じ学校に行くと言い出したからだ。さすがにそれだけは止めてくれと太助は頼んだが、アヤは絶対に行くと言い張った。そこで二人の争いが始まった。

「一緒に学校に行かないと意味がないでしょ？」

「俺が気にすることじゃない」

「この計画には人間側の代表者も期待してるのよ」

二人は悪魔と人間の共存を考えている両種族の穏健派達の提案した実験の被験者だ。悪魔と人間の共存は可能なのかのテストなのである。アヤはその実験何故か、乗り気である。しかし太助はかなり否定的だった。そんな実験が上手くいくはずがない。悪魔と人間の共存など不可能なのだというのが彼の持論である。退魔師としては当然の考えだ。

「勝手に期待されてこっちは迷惑だ」

「くじ引きで決まったんだから、仕方ないでしょ」

「そんな重要なことをくじ引きで決めていいのかどうか疑問だ」

「とにかく、私は絶対に学校に行くからね」

アヤが当然だというように主張した。しかし、太助は悪魔は学校にいけるのかと尋ねる。するとアヤは得意げに一枚の紙を広げる。そ

れを見て太助は啞然とする。

「許可書よ。偽装なんかじゃないわ」

太助は何も言えなくなった。アヤはこれでどう？というような顔をしている。悪魔の在住はある程度は認められている。だが、やはり人間と同等の扱いをされることはまず無い。選挙権はもちろんない。

義務教育も受ける権利も無い。それに悪魔が住める地域も限定されている。ちなみに太助が住むこの地域は本来悪魔の在住は認められていない。だが、アヤは特例ということになっている。太助はため息をついて、立ち上がる。

「どこに行くの？」

「仕事だよ」

太助は高校生であるが、夜は退魔師としての仕事をしている。今回の実験の際に別にこの仕事を止めるようにとかは言われていない。だが、アヤがどう思つかは別問題だ。太助はさつさとアヤがこの生活に嫌気がさして、出て行ってくれればいいと思っていた。同居している相手が自分の同族を殺すのだ。そう何日も続かないだろう。

「私も行くわ」

「・・・お前・・・本気か？」

太助の想像とは全く違っていた。精神的にショックを受けるかと思っていたのに、それどころか同行するとまで言い出した。

「何か文句あるの？別に罪の無い悪魔を殺すわけじゃないでしょう？」

「俺はそんなに綺麗な人間じゃない」

「悪魔なら誰だって同じ？なら、どうして私を殺さないの？勝てないから？」

アヤが問い詰めてくる。悪魔は全て同じ。人間に危害を与える有害な生物。生きていても何の価値も無い生物。だから消滅させなければいけない。それが太助の持論だ。悪魔は全て同じ。だから悪魔と人の共存など不可能。だが、どうしてアヤを殺さないのだろうか。



いや、殺せないのだろう。相手に戦意がないから。アヤがこちらに敵意を見せてこない限りは刃を向ける必要も無い。

「・・・悪魔との同居なんて調子が狂っただけだ」

「なら、私を斬ればいいじゃない」

にこにこ笑いながらアヤが言う。それが逆に嫌だ。結局太助の仕事にアヤはついてきた。今回の仕事は街の見回りなので、悪魔が街の中にいなければ戦う必要も無い。

「あなたは・・・今回のことどう思ってるの？」

「早く終わればいいと思ってる。お前は？」

逆に尋ねられ、アヤは少し戸惑う。昨日からアヤから話すことはあっても太助がアヤに話しかけてくることはなかった。アヤは少し考え込んで答えた。

「私はおもしろそうと思ってるわ。これから何があるかは知らないけどね」

「おもしろい？」

憎むべきはずの相手と同居して何がおもしろいのだろうか。太助には分からない。太助から見ればアヤは敵だ。それはアヤから見ても同じはず。その敵と暮らすことで何の利益が生まれるのだろうか。

イライラするだけだろう。

「だって、こんな事滅多にないでしょう？おもしろいじゃない」

「・・・変わってるな、お前は」

「あなたもね」

この日結局悪魔はいなかった。仕事を終え、家に帰宅した太助は布団

の中に潜り込んだ。そして考えていた。どうすればこんな生活から抜け

出せるのかを。どうすればアヤがこの生活をやめたいと思うかを。

隣の部屋ではアヤが座り込んで考えていた。

「全く・・・もう少し楽しそうにしてくれてもいいのに・・・」

どうすれば太助は笑ってくれるだろうか。どうすれば同じように  
楽し

んでくれるだろうか。

「まあいいわ・・・焦っても結果は出ないもの・・・。ゆっくりでいい  
のよね」

そんなことを呟きながらアヤは目を閉じ、眠りについた。

### 三話「初めての学校」

三話「初めての学校」

「学校つてわくわくかるわね・・」

「それはお前だけだ」

アヤは横からの冷たい言葉にむっとする。そんなことは気にせず太助は学校に向かい歩いていく。結局アヤが太助と同じ学校に通うことになるのを太助は止めなかった。せめて登下校は別にしようとは提案したが、それでは意味が無いの一言で却下された。

「全く・・もう少し楽しそうにしてもいいんじゃない？」

「隣に居るのがお前じゃなかったら、もっと楽しいよ」

「それって、まるで私が楽しくない原因みたいじゃない」

太助は何も言わず無視して歩こうとする。すると隣から鞆が頭めがけて飛んできた。ギリギリのタイミングで回避する。

「やっど・・本性を現したか、悪っ・・」

太助の口をさつとアヤが手で塞ぐ。アヤは特例でこの地域に住むことを許されているが悪魔であることがばれば大変なことになる。見た目は普通の人間の女の子と違いなので悪魔であることを言わなければまずばれないだろう。

「・・すまん・・」

「いいよ。今のはちょっとやりすぎたしね」

二人がそうこうしている内に学校についた。太助は教室へ向かい

アヤ

は職員室へと向かった。まだ手続きが残っているらしい。同じクラス

にはなりたくないと思っているが、どうも同じクラスになりそう  
な気

がする。教室へ入り、自分の席に座る。

「よう。聞いたぜ、今日は誰かと一緒に来てたってな」

前の席の松田翔平が話しかけてくる。にたにたと笑っている。松田は  
クラスの中で一番の噂好きだ。普段太助は一人で登校することが  
ほと  
んどで誰かと来る事など滅多にない。それも女子となら絶対にな  
い。

松田はアヤと太助と一緒に歩いているのを誰かに聞いたのだろう。  
「見た事がないって言ってたけど・・・後輩か？」  
「転校生だよ。家が近くなんだ。道が分からないから、一緒に来た  
だけ」

どうせいずれは分かることだ。言ってしまったても問題はないだろ  
う。

だが松田は更ににたにたしながら言ってきた。

「かなり親密そうだったって聞いたんだが・・・」

「お前・・・見ただろ。聞いたんじゃないくて」

松田はさあなと答える。結局朝のホームルームが始まるまで松田  
からの

質問攻めにあつた。そしてやっとホームルームが始まり解放され  
ると担

任の口から聞きたくない言葉が聞える。

「今日は転校生を紹介するぞ。・・・それじゃあ、入りなさい」

クラス中が期待する中、太助はため息をついていた。やはり同じ  
クラスか。

あまり当たってほしくなかった予想なのだが。教壇の所にアヤが  
立つ。そ

して自己紹介わ初めた。アヤの髪の色は黒なので日本人としても  
十分に通

用する。瞳の色も日本人のそれと同じだ。だが名前が名前なので  
とりあえ

ずイギリスと日本とのハーフという設定らしい。

「これからよろしく願います」

「席はあそこだ」

と言って担任が指した席は太助の隣だった。太助の隣はずっと空いたまま

だったが、まさかそこにアヤが来ることになるとは。アヤは太助の隣に座る。

「よろしくね」

「・・・ちっ」

思わず舌打ちしてしまう。前では松田がにたにたとしている。

「原田は、教科書が届くまでアヤに教科書を見せてやるように」

「・・・はい」

渋々といった感じで返事をする。その隣でアヤはにここにとしていた。担任

任が教室から去ると、アヤの周囲に人だかりが出来る。後数分すれば一時

間目が始まるというのに。太助は教室の隅へと移動する。太助は教室の一

番左隅の席に座っている男子生徒に話しかける。

「・・・疲れてるような顔してるな・・・」

「最近いろいろとあってな」

「ああ・・・研究か」

男子生徒は頷く。名前は古川隼人。何の研究かは知らないが、とある国家

プロジェクトに携わっているらしい。そのせいか毎日寝不足のようだ。そ

してここ最近は何にそれが顕著に現れている。どうも研究が行き詰っているらしい。

「あんま、無理はするなよ」

「ああ・・・。研究が終わればいくらでも休みは取れる」

チャームが鳴ったので太助は自分の席へと戻った。席に座り、一時間目の

授業の用意をしていると、アヤが話しかけてきた。隼人の方を指差して

何者なのかを聞いてくる。

「・・・退魔師じゃないわよね？」

「ああ、そのはずだ。ただの高校生じゃないことは確かだが」

だが、それでも普通の人より少し技能が発達しているに過ぎない。  
太助

のように特殊な力を持った者ではないはずだ。

「・・・それにしても少し変ね・・・」

「変？」

アヤは頷いた。普通の人間の気配にしては少し妙だと。まるで人間じゃ

ない何かが隼人の周りにずっと漂っているかのような感じらしい。

「・・・精霊だと・・・まずいわね」

「お前の正体が気づかれるってことか」

だが、その日は何事も無く終わった。隼人が二人に話しかけてくること

はなかったし、アヤが危惧しているようなことも起きなかった。

人間と

悪魔が対立しているように精霊と悪魔もかなり仲が悪いらしい。

だが隼

人にまとわりついているのが精霊だと決まったわけではない。

「帰ろっか」

放課後になると、太助はアヤと一緒に家へと帰宅する。二人が教室から

去っていったのを見ていた隼人はため息をつく。

「気にしすぎだ・・・悪魔が全て悪いわけじゃないだろう」

『悪魔の味方をするの？私じゃなくて？』

「お前の相手をしていると疲れる……。あの悪魔が何も起こさない限りは

こちらから手を出す必要はないと言っている」

隼人は誰も居ないはずの教室でぶつぶつと呟っていた。だが誰かと会話

をしているようだ。隼人の肩の辺りに小さな光る物体があった。手の平

くらいのサイズだ。その物体に向かって隼人は話しかけている。

『何か起きてからじゃ遅いのよ』

「・・・少し様子を見てからでも遅くないだろう」

『分かったわ。・・・もう少し様子を見る』

隼人はまたため息をついた。あの悪魔がこの学校内で悪さをしない限り

攻撃する必要も無い。だが、もしあの悪魔が妙な動きを見せれば隼人は

友人である太助ごと悪魔を粉砕する必要がある。

「・・・そんなことはしたくないんだがな・・・」

隼人の呟きに対する返事は無かった・・・

## 四話「第一次報告書」

四話「第一次報告書」

「・・・第一次報告書？」

「この実験が始まってから一週間目だからね。この報告書に必要な事項を記入しろだつてさ」

奇妙な同居生活が始まってからすでに一週間。アヤが学校にも慣れてきた頃、二人の家に書類が送られてきた。その書類の表紙には第一次報告書と書かれている。書類を一通りみるとマーク形式と記述が混ざったものであった。一番上には深く考えずにお答えくださいと記入されている。

「・・・じゃ、私も自分の部屋で書いてくるから」

「ああ」

報告書の注意書きの欄には相手とは別々の部屋で行う事。決して見せることがないようにと書かれている。太助は筆箱からシャーペンを取り出し、書き始める。

「えっと・・・始めは・・・はいなら1でいいえなら2か・・・」

正直に言つてこの実験を中止にしたいと思つている

太助は迷わず1を塗りつぶす。そんな調子ですつと二択のマークが続いていく。そのころアヤも隣の部屋で書き始めていた。

「・・・えっと・・・はいなら1でいいえなら2ね・・・」

一つ目の問を見てアヤは迷わず2をマークする。アヤもさつさと

マーク

を続けていく。二人ともマーク形式の方はすぐに終わった。そして記述の部分にとりかかる。

相手のことをどう思っているか

「・・・かなりうざい奴」

太助は素直に記入する。確かにアヤが来る以前はずっとこの家に一人



だったので少し楽しかったりもするが、やはり居ないほうがいい。

ア

ヤがもし悪魔でなかったのなら、話は別だろうが。やはり悪魔との同

居などずっと続けたいとは思わない。むしろ早く終わって欲しいと思っ  
ている。次の質問を太助は見る。

もし相手が悪魔（もしくは退魔師）でなかったのならどう思うか  
「・・・」

太助は思わず黙ってしまう。もしアヤが悪魔で無かったのならどう  
なのだろうか。思わず手を止めて考えてしまう。アヤが嫌いなわ  
け

ではないだろう。悪魔が嫌いなだけだ。アヤのことを本当に憎んで  
いるのであれば一週間もこの生活は続きはしない。結局太助にと  
って

憎むべきは人間の敵となる悪魔なのだ。人間と共存しようと考え  
てい

る悪魔なら何とも思わないのだろう。アヤのように。そのころア  
ヤも

隣の部屋で悩んでいた。全く同じ質問で。

「むむむ・・・」

アヤは別に太助が退魔師であろうと普通の人間であろうとどちら  
でも

良いと思っている。太助は太助だ。退魔師であつても普通の人間で  
あつてもその部分に変わりはない。何とも思わないはずだ。だが  
本当

にそうだろうか。もし、太助が普通の人間ならこんな同居は成立  
して

いないだろう。その後数分経って、アヤは太助の居る部屋に戻る。  
太助も報告書を書き終えたらしく、封筒に報告書を入れていた。

「書き終わったみたいね」

「ああ。お前もか？」

アヤは頷く。アヤは太助の隣に座った。いつもなら正面に座るのだが

今日は隣に座りたい気分だった。

「これ、どうするんだ？」

「明日、誰かが取りに来るらしいよ」

アヤが聞かされた話では二人の日常を誰かが常に監視しているらしい。

悪魔と人間それぞれ代表者一人がその役に就いているらしい。その誰

かが報告書は回収に来るようだ。

「・・・太助は・・・さ、やっぱりこんなのやめたいよね？」

「・・・別に。どっちでもいい」

「え？」

思いもしなかった返答に思わずアヤは驚いてしまう。昨日までなら絶

対に早く終わらしたいと言っていたのに。何か心境の変化でもあった

のだろうか。

「・・・俺はどっちでもいい。・・・お前は？」

「私は・・・もう少しは続いてほしいかな・・・」

アヤはそう言ってから何故か顔を赤くする。太助は首を傾げ不思議そ

うに見ていた。

「熱でもあるのか？」

「そ、そんなんじゃないわよ」

「だったらいいけど・・・」

太助の隣でアヤは小さくため息をついていた。今はそのため息の理由を

太助に話すわけにはいかない。だが、もう少しすればいずれは言

うつも

りだった。その時まではずっと自分の中だけに留めておかなくて  
はならない・・

## 五話「精霊と悪魔」

五話「精霊と悪魔」

「・・・どうかしたの？古川君」

「いや・・・なんでもない」

とある休み時間。隼人はアヤに何かを言うつもりだったのか近づいてきたが、すぐに離れて言った。アヤは太助の腕を思いっきり引っ張った。そして、そのまま廊下へと連れて行く。

「・・・何かあったのか？」

「古川隼人・・・彼・・・本当に普通の人間なの？」

「ああ。俺みたいに退魔師じゃないとは思うが・・・」

だが、隼人はアヤをまるで化け物のように見ていた。見た目で判断出来るはずはない。だが、隼人は他の者と違う目線でアヤを見ていた。まるでアヤが悪魔だと分かっているかのように。

「・・・精霊と契約しているのかもしれないわね」

「可能性は否定できないが・・・」

それでも警戒する必要はないだろう。隼人が何の理由も無しに誰かを攻撃することなどまず考えられない。そういう性格ではないからだ。完全平和主義というわけではないが、それでも自ら争いを起こそうとするタイプの人間ではない。

「彼はそうかもしれない・・・でも、契約している精霊が彼と同じとは限らないわ」

このアヤの不安が見事に的中したのは昼休みであった。アヤと太助の二人はいつも校庭の隅の方のベンチに座って弁当を食べている。アヤが来るまでは購買のパンであったが、アヤが来てからはアヤが毎日弁当を作ってくれている。二人で弁当を食べている最中、アヤが箸を弁当の上に置き周囲を窺っている。

「・・・どうかしたのか？」

「・・・不安が的中したみたい・・・」

く。  
アヤの言葉の意味はすぐに理解できた。周囲の風景が変わってい

退魔師と悪魔や、悪魔と精霊の戦いは周囲の建物や生き物にも影響を与える。双方が力の全てをぶつけ合うために、相当の被害が周囲に出てしまうのだ。そこで、優れた退魔師や、力の強い精霊、悪魔は戦いの際に閉鎖空間という存在しない空間を作り上げる。周囲の世界から完全に閉鎖された空間。その内部で戦うことにより、周囲への影響をゼロにするのだ。

「・・・閉鎖空間を作り上げるなんて・・・よほど強い力みたいね」

アヤの足元に光弾が叩き込まれる。ギリギリで回避するが、何発も連続で撃ち込まれれば避けれるのは難しくなってくる。太助とアヤの目の前に白い光の球体が出現する。これが精霊の仮の姿だ。普段人間の世界にいる精霊はこういう形をしている。この力の時、精霊は使える力が大幅に制限される。

「あなたが・・・古川隼人の契約制霊ね？」

『そうよ。私が隼人の契約制霊・・・アクア』

「一体なんのつもり？あなたの契約者は私との戦いは望んでいないよう  
だけど・・・」

『隼人を守るためよ。あなたのような悪魔からね』

白い球体が変化していく。その姿は人間そのものであった。精霊は上級  
と下級の二種に分別される。下級精霊であれば、その力は大した  
ことは  
ないが、上級精霊となると、そこにいるだけで周囲の環境に影響  
を与  
えてしまうほどの力となる。そのため、精霊は仮の姿で普段は過  
ごし  
ている。だが、閉鎖空間を作り出したアクアは仮の姿から真の姿  
へと

変化した。青い髪と青い瞳を持つ精霊が今二人の前にいる。

「こちらに戦う意思はないわ」

『悪魔の言葉なんて信じられないわ』

「・・・どうしてもっていうなら、戦うけどね」

アヤがアクアに迫る。一瞬で勝負をつけれるとアヤは考えていた。アヤは上級魔だ。そこら辺の上級精霊に負けるほど弱くは無い。だが、アヤの腕がアクアを掴む前にアヤの体が宙を浮いていた。そして、数秒後アヤの体が地面に叩きつけられる。

「っ・・・」

「アヤ、大丈夫か？」

「な、なんとかね・・・」

アクアが腕を振りかざした。アクアの腕が青く輝いていく。魔法を使うつもりだろうか。人間の使う魔法より精霊の使う精霊魔法の方が威力が高い。更にまだアヤは態勢を立て直していない。このままではまずい。

『これで・・・終わりよ』

アクアの放った青い光の弾がアヤに向かって飛ばされる。アヤは瞬時に

反応し、光の弾を相殺する。だが、アクアは更に強力な魔法を放とうと

していた。太助はどうしようも出来ずにただ、見ていた。この二人を止

めれる力など持つてはいないし、二人が話を聞いてくれるとは思えない。

例えば聞いてくれたとしてもそれで戦いが終わるとは思えない。だが太助

はここで一人の人物を思い出す。

「そうか・・・あいつなら・・・」

太助は閉鎖空間から何とか抜け出し、校舎へと向かっていた。古川隼人。

精霊アクアと契約する人間に彼女の制止を頼むために・

## 六話「保険」

六話「保険」

『・・・しづといわね・・・』

「そろそろ諦めたら？あなたじゃ私は倒せない」

アヤとアクアの戦いは更に激化していた。最初はどうにかしてアクア

を黙らせようとしていアヤであつたが徐々にその考えがエスカレート

してしまったのだ。そこへ隼人を連れた太助が戻ってくる。

「・・・原田、お前は悪魔の方を抑えろ。俺はあいつを止める」

「ああ・・・」

隼人がアクアの方へと向かつて歩く。隼人の服装は制服ではなかった。

この閉鎖空間に入った時から服装が変わってしまっている。黒一色で統

一された身動きのしやすい服装。まるで死神を想像させる姿だ。

その服

装を見て、アヤの動きが止まる。よく見ると微妙に震えているのが分かる。

る。

「アヤ？」

「な・・・なんで・・・なんであいつが・・・」

アクアも隼人に気づき動きを止めた。閉鎖空間はすぐに解除される。それ

と同時にアクアは仮の姿に戻り、隼人の服装も制服へと変わっていた。ア

ヤはまるで見てはいけないものをみたかのようなリアクションだ。何をそ



ここまで怯えているのだろうか。

「アクア、もうこの悪魔には手を出すな」

『でも・・・』

「・・・俺が討つのは人間に危害を及ぼす悪魔だけだ」

アクアがその言葉に頷いた。隼人はそのまま校舎へと戻ろうとしたが納得

出来ない人間が一人。それは太助であった。なぜアヤがここまで怯えてい

るのが分からない。

「・・・それはそいつに聞け。昔話は嫌いだからな。行くぞ、アクア」  
アクアを連れて隼人が校舎へと戻っていく。アヤは閉鎖空間を展開した。

理由は誰かに聞かれるとまずいからだそうだ。アヤはうつむきながら話

始めた。隼人の事について。

「全く気づかなかったわ・・・まさか・・・狩人がいるなんて・・・」

「狩人？」

「多分あなた達がまだ中学生だった頃よ・・・私達悪魔を次々と倒していった

一人の中学生がいたの・・・」

悪魔の中ではかなり有名な話らしい。退魔師の大半は力押しで悪魔を殲滅

しようとする。だが、狩人は違った。まるで獲物を狩るハンターのように

悪魔を狩っていた。いろいろな手段を使って。だが、狩人はとある行動を

起こした悪魔しか狩らないという噂もあった。人間に牙を向いた悪魔の大

半が狩人にその命を狙われている。大半の者は殺され、一部の者は命から

がら逃げ延びた。

「一年前・・・ある悪魔が精霊と契約している人間を葬るためにヨーロッパ

で大規模な戦いを起こしたの・・・」

そこに狩人は現れた。そして、狩人は戦いに参加した悪魔を全て殺した。

狩人もその戦いの中力を全て使い果たしたといわれるほどの激戦であった。

もちろん閉鎖空間の中でだが。それでも両陣営とも多数の負傷者を出した。

その結果持ち上がったのが今回の計画だという。人間と悪魔の共存という。

「・・・この学校に転入したいっていうのは私の希望だけじゃなかったの」

「まさか・・・計画に携わっている連中が・・・」

「ええ。ここに通いなさいって・・・」

狩人はその戦い以降姿を見せていないという。最後に確認されたのは東京

らしい。人間を襲おうとしていた一体の悪魔が閉鎖空間内で殺されそれ以

来狩人を見た者はいない。噂ではその時襲われたのが人間内部の穏健派つ

まり、人と悪魔の共存を実現させるという今回の計画に携わっている一人

だったらしい。

「この学校を指定した理由が分かったわ・・・過激派から計画を守るためね」

「隼人も計画に関わっているのか・・・」

「恐らくはね・・・。狩人がいれば人間側ね悪魔側も過激派からの攻撃を防げ

るもの」

悪魔側はもちろん、人間側にも狩人に恐怖を感じる者は多い。あくまで噂

だが、狩人は一度悪魔排斥を目指す組織と交戦し、これを壊滅させている

らしい。理由さえあれば同族である人間にさえ牙を向く。それが狩人の恐

ろしさである。

「どうも怪しくなってきたな・・・」

「え？」

「・・・考えてみる、狩人と呼ばれるほどの凄腕を計画に携わる連中はどうして

味方につけた？」

答えは簡単だ。保険のためである。太助とアヤを守るための保険。それが狩

人の役目なのだ。人と悪魔の共存を目指すこの計画には敵が多すぎる。計画

の関係者達はそれらの敵から二人を守り通すために狩人を味方につけた。

「・・・敵が襲ってくるかもしれない・・・ってことね？」

「ああ・・・」

それも少数ではない。恐らく大規模な部隊が。最初から二人を監視している

であろうはずの者達は敵が二人を殺しにかかることを知っていたのだろう。

そうでなければ狩人など呼ぶはずがない。仮に狩人が彼らの提案を断ったと

すれば、彼らに著しい被害が出ていたかもしれないからだ。それだけのリス

クを背負ってでも、狩人を誘わなければならなかった理由がある

の  
だ  
ろ  
う。

「思っていたより勘がいいようですね・・・原田太助殿」

少し不安を覚える二人の前にひとりの男が突然姿を現した・・・

## 七話「交戦」

七話「交戦」

「私の名前はアレックス。共存計画の関係者の一人です」

「共存計画？」

「人と悪魔の共存を実現するための計画・・・我々はそれを共存計画と呼んでいます」

アレックスと名乗った悪魔は二人の監視役を務めていたらしい。

護衛役

も担っていたようだ。第一次報告書を回収したのも彼のようにだ。

共存計画

実行委員会。それがアレックスの所属する組織の正式名称。実行委員会に

は人と悪魔の和平芭對話路線派と呼ばれる者達が参加しているらしい。

「・・・それで・・・あなたは何をしにここへ？」

「二人の護衛ですよ。・・・どうも過激派がこの街にいるようなのでアレックスは実行委員会からの指示を受け学校までやってきたらしい。

普段は学校での二人の警護は狩人が担当しているようなのだが、アレックス

もここへ来るように指示を受けたらしい。アヤと太助は驚いている。そこ

まで事態は深刻なのだろうか。

「なんにせよ、閉鎖空間の中でよかった。こういうのは何か起きてからでは

遅いですからね」

「・・・何人くらいいるんです？」

アレックスは真剣な顔をして答えた。

「確認されているだけで十五人です」

最低でもそれだけはいるとのことだ。下手をすればその倍はい  
るかもしれ

ない。アヤの表情が強張る。過激派が狙うのはアレックス達では  
ない太助と

アヤの二人だ。

「狩人の方も動き出したようですね・・これで少しは安心ですかね」

「狩人をそんなに信用していいの？」

アレックスは当然というように顔で頷いた。アヤはどうしてか理  
由を尋ねる。

「彼は嘘をつきませんよ。そういう人間じゃないんです」

それに理由があれば彼は悪魔を助けることだってすると言った。  
理由さえあ

れば憎むべき存在を助けることだってする。だから委員会は狩人  
を味方につ

けたのだと。アヤは納得していた。それなら信用することは出来  
るだろう。

「・・狩人はどうしてあなた達に協力しているの？」

アレックスは黙っていた。何か複雑な事情があるのだろうか。や  
がてアレック

スは口を開いた。

「お喋りはここまでのようですね。・・ここを離れてはいけません  
よ」

アレックスは閉鎖空間を出て行く。どうやら敵が来たようだ。太  
助はアヤの

方を見る。太助はともかく、アヤは上級魔なので守られるほど弱  
くはないだ

ろう。それに悪魔は元々好戦的な種族だ。ここに居ると言われて  
その命令を

素直に聞くとは思えない。だが、アヤは動こうとはしなかった。

「・・・行かなくていいのか？」

「・・・言ってたじゃない、ここを動かなくて。私は勝ち目の無い戦いをするほど

ど愚かじゃないわ」

「勝ち目が・・・無い？」

アヤは頷いた。ここに送り込まれてきているのは過激派の中でも戦闘に優れ

た精鋭達だ。上級魔の最高ランクに近い者達がやって来ている。

上級魔の底

辺にいるアヤでは勝ち目がない。一対一ならば、まだ少しは希望があるだろ

うが、アレックス達の調べでは最低十五人はここに来ているのだ。太助は不

安になつてきた。アレックス一人でそんな化け物の集団に勝てるのだろう。

アヤと太助がいる閉鎖空間とは別の閉鎖空間でアレックスは戦っていた。

「・・・よくここまで精鋭を集めたものだ」

「貴様ら和平派を叩く絶好のチャンスだ。・・・しくじるわけにはいかん」

「私達を叩く？・・・笑えますね、その冗談」

アレックスを四人が囲む。身動きが取れないほどではないが、かなりまずい

状況だ。それでもアレックスは降参などはしない。過激派の悪魔

達がアレック

スを追い込んでいく。

「・・・全員での攻撃には耐えれまい」

「・・・やらなくては分かりませんよ？」

過激派の悪魔達が一斉に攻撃した。煙が上がり、視界が悪くなる。だが回避

出来たはずもない。近距離、それも四方からの同時攻撃だ。それも一発では

ない。何十発という魔法弾が飛んでいった。過激派の悪魔達は勝利を確信し

ていた。後はアヤと太助を殺すだけ。全員が太助達の居る場所へと歩き出し

た時、一人の悪魔が倒れた。全員が一斉に振り返る。そしてその表情が凍り

つく。

「まだ・・・生きている・・・いや・・・無傷だと？」

「だから言っただけですよ。やってみなければ分からないとね」

「貴様・・・幻影師アレックス・・・」

アレックスが笑う。また一人悪魔が倒される。アレックスはそこから一步も

動いていないのに。

「この閉鎖空間に入った時からあなたは負けているのです」

アレックスの得意とする魔法は幻影魔法。幻を相手に見せ、困惑させたりする。

今回の場合この閉鎖空間そのものに魔法をかけた。幻影の霧に包まれたこの閉鎖

空間に入った者全てが幻覚を見せられる。アレックスが動いていないのではない。

動いていないように見えているだけだ。先ほどの一斉攻撃も最初からあの位置に

アレックスはいなかった。居るように見えていただけだ。

「どうせここで死ぬんです。教えましょう・・・私達の組織の中で私は一番格下です」

アレックスは過激派の悪魔四人を蹴散らした。閉鎖空間を解除し、二人の居る

場所に向かう。丁度その頃、狩人の方も戦闘が終わっていた。狩



人の方に向

かったのは三人。恐らくは一人も生きてはいないだろう。となる  
と、これで

十五人の内七人が消えた。残り8人。隼人は校舎の屋上にいた。

傍にはアクア

もいる。

『どうして黙っていたの？』

「話していてもお前は協力しなかっただろう」

『それは・・・』

アクアが口ごもる。アクアはさっきは聞かされた。悪魔達の中で  
人類との共存

を目指す一味を助ける事を。アクアは極端に悪魔を嫌っている。

例え最初から

アクアに告げていたとしても、アクアは協力はしなかっただろう。

だから隼人

は言わなかった。

「お前に無理に協力しろとは言わん。・・・敵があの程度なら一人で  
倒せる」

『・・・協力はするわ。でも・・・悪魔のためじゃない』

「俺だつて悪魔のためにしているんじゃない。・・・人と悪魔の未来  
のためだ」

隼人はアヤと太助こそが悪魔と人の戦いを終わらせ、新しい世界  
を築くはず

だと思っていた。あの二人が世の中を変えてくれると。だから死  
なせるわけ

にはいけない。あの二人を守ること世界が変わるなら命だつて  
賭けれる。

例え、どれだけ犠牲を払ったとしてもあの二人だけは守り通さ  
ねばならない・・・

## 八話「変わり始めた気持ち」

八話「変わり始めた気持ち」

過激派の襲撃から二週間が過ぎた。この二週間の間は過激派も動きをみせて

おらず、アヤと太助の生活はすっかりと落ち着いていた。だが、最近アヤは

妙に太助のことを意識するようになってしまっていた。太助がそれに気づいて

いる様子はないが。

「・・・悪魔と人が友達になるのって・・・どう思う？」

「友達くらいならいいと思うが・・・」

「友達くらいならね・・・じゃあ・・・恋人とかは？」

それは無理だと太助は断言した。人であつたとしても、住む国の違いでいる

いろと習慣が違ってきたりして大変なのだ。種族が違う人と悪魔が恋人に

なつたとしても、長く続きはしないだろう。その言葉を聞いてアヤは少しうつ

むく。やはり、人と悪魔の共存など不可能なのだろうか。いや、友としては

生きていけるのだろう。だがそれが、恋人や家族となつてくるとまた別の話

になってしまう。

「なんでそんなことを聞くんだ？」

「な、なんでもないわ。ちよつと気になっただけよ」

太助は首を傾げていた。アヤはごまかすように話題を変えようとする。

「それより・・・これからどうなるのかな・・・」

アレックスは襲撃事件の後、計画が中止になることも可能性としては否定でき

ないと言っていた。アレックス達は他の人間を巻き込むことはないが過激派

にとつてはそんなこと関係ないだろう。過激派が動き出したことによりこの街

の人間が巻き込まれる危険性も出てきたのだ。太助も考え込む。アレックスも

過激派が精鋭を送り込んできている以上、街の人間に危険が出る事は大いに

ありうると言っていた。そしてそれを自分達は望まないとも。

「このまま中止になれば・・・良いつて思ってる？」

「・・・正直言つて分からない・・・」

太助はため息をついた。自分の事なのに分からない。自分がどうしたいのか。

最初は早く終われば良いと思っていた。だが、今はそれを望んでいないよう

な気がする。もう少し続ければ良い。心のどこかではそう思っているかもしれない。

「・・・」

「・・・太助・・・」

「でも・・・他の人達のためには中止にすべきなんだろうな」

太助とアヤにはどうしようもない。計画の中止か続行かを決めるのは実行委

員会の中枢メンバー達なのだ。アレックスですらどうなるかは分からないと

言っていた。

「・・・ちよつと出かけてくるね」

「ああ・・・気をつけろよ」

アヤはその言葉に頷く。そして玄関から外に出る。目的地など無

かった。ただ

少し歩きたかっただけだ。もし計画が中止になればもうアヤがあの家に居る理

由は無くなる。太助の傍にいる理由も。もつといえはこの世界にいることすら

出来なくなるかもしれない。いろいろな特権が今は与えられている。だがそれ

は計画のためだけだ。彼女個人に与えられた物ではない。

「・・・何か悩んでいるようだな」

いきなり声をかけられ、アヤはびっくりする。振り返るとそこには隼人が立って

いた。

「か・・・古川君・・・奇遇だね・・・こんな所で・・・」

「狩人でいい。・・・閉鎖空間を出すぞ」

アヤは頷いた。すぐに閉鎖空間が出来上がっていく。普通の人はこの空間に入る

ことは出来ない。悪魔や退魔師のように力を持っていれば別だが。

「共存計画の事か？」

「・・・あなたはこうしてこの計画に協力しているの？」

「理由などない。ただこの計画に賭けているだけだ」

「賭ける？」

この世界の未来をと隼人は答えた。人と悪魔の戦いは昔から続いている。その戦争

で関係の無い人間が巻き込まれ、幼い悪魔達も容赦なく殺された。

両陣営とも戦力

は疲弊しきっているはずだった。悪魔側でさえ、精鋭中の精鋭が数年前には殺され

人間側も退魔師はここ数年で減少している。それでもなお、戦争が終結しようとは

しない。

「戦争を止めるために武力を使つては逆効果なのだ」

「だから・・・共存が必要だと言うの？」

「人も悪魔も互いに分かり合えるはずだ。・・・俺はそう信じている」  
「もし・・・それが出来ない場合は？」

隼人が黙り込む。数分してから隼人は口を開いた。

「その時は殺すしかない。戦いを望む者を全て」

隼人の言葉に迷いは無かった。彼なら本当にそうするだろうとアヤは思った。計画

が失敗し、人と悪魔の共存が出来ないとすれば、隼人を含めアレックス達はこの世

界で争いを望む者達を一人残らず討とうとするだろう。平和を實現するために。だ

が、それが正しい事なのだろうかとアヤは思った。それではまた別の憎しみを生む

だけだ。

「だから必要なのだ。この計画は。人と悪魔が互いにその存在を認め合うことが平和

への第一歩となる」

「存在を・・・認め合う・・・」

アヤは考えていた。存在を認め合うとはどうすればそう言ったと言えるのかを。ど

うすれば太助はアヤを認めてくれるのか。アヤは太助を認めれるのか。そもそも悪

魔と人の違いは何なのだろうか。人にも善悪があるように、悪魔にも善悪はある。

人を守るために命を賭ける悪魔だつて中に入る。何が悪で何が正しいのか。考えれ

ば考えるほどわけが分からなくなってくる。気づくと隼人はいなかった。

「・・・存在を認め合う・・・それが平和への第一歩・・・」

退魔師かどうかなんて関係ない。アヤは太助の傍に居ればそれでいい。それこそが大事なのではないか。アヤは自分の頬を叩いた。気合を入れるために。

「・・・私は・・・太助の傍に居るためにすべきことをする・・・」  
まるで自分に言い聞かせるようにアヤは呟いた・・・

## 九話「願い」

九話「願い」

「計画の中止が決定しました」

太助の家で太助とアヤはアレックスから計画中止の通達を聞いていた。理由は

これ以上アヤをここに置いていれば、この周辺の地域の人々が危険に晒される

可能性があるからだ。

「ですが・・・あと三日間・・・三日間だけここに居てもいいそうです」

「・・・三日間か・・・」

それが許された期間。三日間が過ぎればアヤは有無を言わず強制的に戻される。

アレックスはため息をついていた。アレックスも隼人と同様にこの計画に人と悪

魔の未来を託していたようだ。だからこそ、計画の中止はシヨツクなのだろう。

「・・・では私はこれで・・・」

「私の意志でここに居ることは出来ませんか？」

家から出ようとしていたアレックスの足がアヤの言葉を聞き止る。そして振り返る。

「無理です。・・・あなたも分かるでしょう？それがどれだけ周囲に迷惑をかけるかを」

アヤは一瞬黙る。だが、ここで退くわけにはいかない。アヤはどうにかできないか

とアレックスに聞く。当然アレックスの返答は同じであった。実はアレックス達は

襲撃の事を隠し通すことが出来なかったのだ。そのためこの周辺の人々はこの近辺

に悪魔が住んでいるのではと考え始めている。この計画には日本政府も協力しているが、これ以上騒ぎが大きくなるのであれば協力は出来ないとま  
で言われている。

そのため、これ以上ここにアヤを居させるけにはいけないのだ。  
それはアヤの命に

関わってくる可能性もある。この近辺はこの国の中では悪魔排斥  
の色が濃い。

「あなたのためでもあるのですよ、アヤさん」

「・・・私のため？」

「この地域は悪魔を憎んでいる人も多いですよ。知っていると思  
います」

アヤは黙った。ここにいれば太助の迷惑になる。それをすぐに理  
解した。だが諦め  
れない。

「・・・この三日間の間で決心はつけてください」

そういい残してアレックスは去っていく。アヤは無言で座り込  
んだ。太助はも黙っ

ている。どれだけ経過しただろうか。先に口を開いたのはアヤだっ  
た。

「私も人間に生まれたかった・・・」

そうすればこんなに悩む必要も無い。人間であれば何の問題もな  
く、太助の傍に

いられる。太助はため息をついた。

「・・・そうなら、出会ってるかどうかも分からん」

太助が呟く。アヤにも聞える声で。運命なんてものはあまり信じ  
たくはない。だが

人の出会いには縁というものがある。アヤが人間であつたのなら  
出会っていたかも

謎だし、こうして会話をしているかどうかも分からない。アヤが



悪魔であつたから

こそ二人は出会つたとも言える。太助の言っている事は正しかった。太助が退魔師

だから、アヤが悪魔だつたから二人はこの計画を通して出会つたのだ。

「あと三日あるんだ。その間はせめて楽しく過ごそう」  
「・・・うん」

太助の言葉に戸惑いを覚えつつアヤは返事をした。二人に残された時間は後三日だけ

だった。だが、二人の知らない所で事態は急変していた。「共存計画」の実行委員会

では臨時にメンバー全員が集められるという異変が起きていた。集められたメンバー

の中には当然アレックスや隼人もいる。集められたメンバーは戸惑っていた。後三日

でこの実行委員会も解散するというのに、どうしてまた集まる必要があるのかと。

「我々の危惧していた事が起ころうとしている」  
「!?!?・・・まさか・・・」

隼人は思わず立ち上がってしまう。他のメンバーも動揺していた。アレックスは舌打

ちしていた。隼人は何も言わず部屋から去ろうとする。それに気づいたアレックスが

声をかける。

「どこへ行くのです?」  
「無論、悪魔達を滅ぼしに行く」

「彼らが動いたとはいえ、こちらから仕掛ける理由は・・・」

「放っておけば大勢の人が死ぬ。言つたはずだ、最悪の場合は俺達が悪魔を全て討つと」

隼人の言葉に全員が黙る。「共存計画」と平行して準備されてい

たもう一つの計画。

対悪魔用の特殊部隊の結成。狩人の異名を持つ隼人を中心に、悪魔の討滅者達が多数

参加している。隼人は計画が失敗し、悪魔側が強硬手段に出た場合、その部隊を主力

として悪魔に対し戦争を仕掛けると以前から明言していた。最悪の場合は人間側につ

かない全ての悪魔を討つと。

「残念だが・・・こうなった以上仕方ない・・・。悪魔が切り札を使うならこちらを使う

までだ」

「それではあの戦争の繰り返しとなるだけです。考え直すべきです」  
隼人は何も言わず立ち去った。戦争の指揮を取るために。アレックスはその場に崩れ

去った。隼人は以前数万の悪魔相手にたった一人で挑んだことがある。結果は悪魔達

の惨敗。決して悪魔達も弱かったわけではない。狩人・・・隼人が強すぎのだ。例えば

子供であろうと容赦しない。冗談を言わないのも隼人の性格だ。悪魔の全てを滅ぼす。

「冗談で口にしたのではないだろう。」

「最悪だな・・・。これで二度目の大戦は避けられん・・・」

実行委員会が予想していた最悪のケースへと向かい運命は動き出していた・・・。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3346d/>

---

悪魔と退魔師の奇妙な同居生活

2010年12月15日03時00分発行